

## 第17回図書館研究集会に参加して

影山幸子

### はじめに

平成11年4月、就職以来30余年にして初めて図書館（正確には図書情報管理課）勤務を命じられた私は、図書館の大まかな業務は想像できても館内4課の業務分担さえ分からず、当初は学内外からの問い合わせに四苦八苦し。

加えて、関西大学図書館（以下、「本館」という。）が種々の問題を抱えていること、及び大きな変革を計画していることを初めて知った。この変革計画は、図書館界にとって「印刷技術の発明以来の転換期」といわれ、新聞、ビジネス誌等に毎日のように登場する「電子図書館」という世情と大きく関係しているらしい。

しかし、OPAC<sup>\*1</sup>等の初歩的な専門用語を始め、ガクジョウ<sup>\*2</sup>との関わりや電子ジャーナルなるものの存在等々図書館界の情報を知らない私は、これらの変革の必要性や問題点が本学独自のものなのか？。他大学の現状は？等々の疑問が生じてきた。このような状況の中で見つけた「第17回大学図書館研究集会」の案内状の文言「学術情報提供と次世代図書館サービス - 大学図書館の今後の戦略 - 」は、私にとって非常に魅力あるテーマと映り、参加を申し出た。

### 研究集会の概要

標記研究集会は、平成11年9月9日（木）、10日（金）の両日、全国の国公立大学の図書館を始めとする200余の機関から300余人が参加して、大阪市立大学学術情報総合センターで実施された。

研修内容は表1のとおり、基調講演と2つの分科会及び最終の全体会で構成されており、第1分科会は「大学図書館の電子情報提供と更なる歩み」のテーマのもとに、情報技術の面から、図書館の新しい展開を探るものであった。

私が参加した第2分科会は「大学図書館のアイデンティティ」のテーマのもとに、転換期を迎えた図書館の再組織化を中心課題としており、問題提起者の体験報告の後、フロアーとの間に活発な質疑応答がなされた。

放送大学教授の六本佳平氏（前東京大学附属図書館長）の基調講演は、「大学図書館の電子化をめぐる」とのテーマのもとに、「大学図書館の使命と特性」の視点から大学図書館の電子化の必要性とそこに働く職員の専門性の再構築の必要性を説いたものであった。また、第2分科会の各発表者からは、大変革期を迎えた図書館界において、各機関が開始した新たな取り組みと問題の現状が報告された。

今回は、その中から特に印象が深かったものについて、平成10年12月に本館が策定した「関西大学図書館がめざす方向 - ビジョン7項目 - 」(以下、「ビジョン7項目」という)と絡めて考えてみたい。

### 大学図書館の電子化の必要性

基調講演において六本氏は、大学図書館の使命と現状について、以下のように述べられた。

大学図書館は、学問の専門性に対応する資料の提供と学生の書斎という2つの機能をその特徴としているが、現在の社会状況下では、次のような事情により、十分な必要資料を手元に揃えることが不可能な状況にある。

- 1 専門性がより細分化するため、全ての必要図書を手元に揃えることは困難である。
- 2 専門性の細分化のため、先生方個人の手元（研究室・分館等）に資料が分散化して、学生が利用する中央図書館をはじめ、他の機関からの利用は難しい状況にある。
- 3 学問の専門性の分化により、専門書の価格が高騰する。
- 4 図書費予算の増額が困難な大学図書館の現状では、高騰する外国雑誌等の入手は厳選せざるをえない。

この状況を克服して必要資料を提供する方法としては、大学図書館間の相互利用や電子ジャーナルサイトへの契約等が考えられるが、そのためには図書館の電子化は必要不可欠である。

加えて、ネットワークの進展と資料の電子化の進行は、冊子体資料の保管場所の狭隘化や劣化の問題

解消に一役を担うため、情報技術の発達のもとで、図書館の電子化は加速度を付けて進行し、大学図書館の機能を大きく変化させた。

先にあげられたほとんどの事象は、本館においても問題となっている。特に外国雑誌については、毎年図書委員の先生方を通じて予算に見合う厳しい選書をお願いしている。六本氏は、現在の「図書選定委員」は「図書剪定委員」であり、いかにして切り落としていくかが任務となっているといわれたが、まさに本館でも同様である。

一方、本館は総合大学としては珍しい中央図書館の形態をとっており、教育職員と学生が同一の資料を利用できる状況にあるため、上記2の問題は回避できている。加えて、学部の資料室や研究所等の蔵書情報をK O A L A（関西大学図書館の蔵書検索システム）で検索できるようにデータを整備中であり、これらの機関の収書整理等の業務をも統合した中央図書館機能を有する、本館システム全体のオープンシステムの構築を検討しているところである。

### 大学図書館業務とアウトソーシング

大学図書館職員の業務は、資料の収集・整理と情報の提供である。しかし、その内容は図書館環境と共に変化するものであり、現在は電子図書館機能に対応できる専門性を備えていなければならない。その専門性が従前の専門性と異なることは、図書館司書資格取得に係る教育課程の変更にも一端が現れている。

電子化以前の図書館において大きなウエイトを占めていた整理業務は、多くの図書館においてアウトソーシングの対象になっている。問題提起者の佐藤義則氏（山形県立米沢女子短期大学助教授）は、その理由について、Hirshon A と Winters B が、「整理業務は図書館にとってコア・サービスではない」と指摘していると言われた。加えて、両氏は「アウトソーシングは単なるコスト削減ではなく、図書館全体のリエンジニアリング・プロセスの一環としてはじめて意味をもつ」と説いているとも言われた。この言葉は、問題提起者の小林麻実氏（ユナイテッド・テクノロジーズ・インフォメーション・ネットワークジャパン・オフィス 代表）の「コア・コンピタンスとアウトソーシング」と題する報告（問題提起）の内容とも一致する。

しかし、小林氏の言われる「アウトソーシング」は、私のみならずその場に参加していた人達が、

「アウトソーシング」の言葉からイメージするそれよりもはるかに強烈なものであった。

小林氏は、「業務委託とアウトソーシングとは全く異なるものである。アウトソーシングとは、自分たちがやってきた業務を自分たちより上手に安価に行う外部機関に委託するのであるから、自分達は部門ごと解雇されることを意味する」と、ご自身の体験をもとに話された。

図書館について言えば、「ライブラリー」が「本のある場所、書庫」を意味するのではなく、「情報にアクセスする仕組み」を意味するようになってきた現在では、四六時中情報が入手できる仕組みとパソコンさえあれば「ライブラリーという場所」など必要ないとのことである。となると、「では、生き残るためには何をすべきか？」ということになり、「コア・コンピタンス（氏の言葉を借りれば、「売りはなにか？」と言うこと）」を自分たち自身で創り出して、それをアピールしなければならない。つまり、ある業務を専門の外部業者に委託しても自分達がりストラされないためには、「売り」となる自分たち独自のもの - 利用者の要望に応えられるもの - を創り出さなければならないと言われた。

この「コア・コンピタンス」については、東京大学を始めとする多くの大学が、大学図書館と情報センターやAVセンターを統合して「学術情報総合センター」等の名称で、「情報」関連の組織と連携・協力して、シームレスサービスを展開させるべく、様々な取り組みをしている。しかし、佐藤氏はこの統合について「統合化は手段の一つであって目的ではない。その目的は、デジタル・メディアを含めた研究情報の提供にあたって、利用者が求めているニーズに対してサービス価値を最大限に高めることにある。」と言われた。全体会で上田修一氏（慶應義塾大学教授）が言われた「本学の学術情報センターは、協議離婚して、図書館と情報センターそれぞれの機能を担うことになりました」という言葉は、この「サービス価値を最大限に高める」目的を達成するために統合する大学が多い中で、慶應義塾大学が敢えて行った「売り」の施策ではないだろうか。

本館では、独自の検索システム（K O A L A）を開発し、大学の情報処理センターとの連携のもとに図書館業務を遂行しているが、学術情報の提供メディアが多様化する中においては、学内の情報インフラを最大限に活かした積極的な図書館活動が益々重要になってくると考える。

## 大学図書館職員の役割

学術情報のデジタル化は、図書館職員の業務内容を大きく変化させた。

学生の書斎としての位置づけをもつ大学図書館においては、情報の多様化と専門性の細分化の中で、各人が必要とする情報を検索するためのリテラシーを学生に教授することも図書館職員の業務となりつつある。

今回の研究集会では、京都大学と新潟大学それぞれの図書館職員から、情報リテラシー教育を一般(教養)科目と位置づけて、関係教育職員と図書館職員が一体となってカリキュラムを検討して講義と演習を開講し、図書館職員は演習補助をした経緯が報告された。

本館では現在「図書館ガイダンス」等において希望者に、K O A L A やオンライン情報の検索と利用の方法を指導しているが、学部の「情報処理演習」等の科目に組み込んで広く周知することも、学生の学習する姿勢を助長することにつながるのではないだろうか。学部のカリキュラムに組み込むためには、図書館からの働きかけと図書館職員の資質向上が必須であることが、上記2大学の事例報告で述べられた。

多様化した情報の中から必要な情報を抽出するための情報リテラシーを本学の学生に習得させることは、これからの図書館職員の大きな業務である。今後の図書館職員にとって学術情報リテラシーの知識と教授方法はますます重要になるものであり、組織的、計画的な能力育成と職員各自の自己研修が欠かせないと考える。

## 研究集会を終わって

六本氏は、基調講演の中で「大学図書館は大学の心臓であり、図書は血液である」と言われた。また分科会で、小林氏が言われた「コア・コンピタンス(あなたの図書館の「売り」はなにですか?)」の言葉と、佐藤氏の「図書館業務をアウトソーシングするなかで、図書館の機能に対する意思決定権者の認識とコレクションに関する予算執行権者の意思決定が重要である」との発言は、本館の「ビジョン7項目」の推進において十分意識すべき言葉と受け取った。

平成12年度から本館も閲覧サービス部門の業務を

2ヵ年計画でアウトソーシングすることになった。これは、事務職員の削減や人事異動に伴うサービスの低下を避けると共に、開館時間の延長や開館日数の増加等利用者へのサービス向上を目指したものである。同時に、専任事務職員がコア・コンピタンスに邁進するためである。

最初に述べたように、大学の図書館は「研究者への資料の提供」と「学生の書斎としての空間」をその特徴としており、小林氏の言われる「情報を入力する仕組み」だけでは、その機能を充分発揮できない。そこでは最先端の情報に加えて、古文書等の第一次資料に直接触れられる環境を整備することも重要な地位を占めている。「ビジョン7項目」の一つである「特色ある図書館」を創るため、過去の知的文化遺産や貴重な資料をいかにして収集し、本館の特徴をどのようにアピールするかが、私たち専任職員の任務の一つである。

他方、利用者のニーズを把握したサービスの提供 - 資料の電子化の進行とネットワークの進展を踏まえた窓口対応 - も大きなウエイトを占める。これからの「窓口」対応は、従来のカウンター窓口とE-mail等の電子窓口の2通りがある。しかも、カウンター窓口における対応も、冊子体の図書のみを対象とするのではなく、電子情報のレファレンスも必要である。

つまり、ホームページで積極的な情報発信をすると同時に、小林氏の言われる「情報が入手できる仕組み」を構築することも重要である。今回本館が行ったホームページの改定は、情報サービスを展開するため「図書館電子カウンター」機能の充実を目指すものであり、本館は「ビジョン7項目」推進の第一歩を踏み出したのである。

今回の研究集会に参加して、参加前に感じていた図書館の電子化の必要性、アウトソーシングの問題、図書費予算の削減への対応等の疑問が解けるとともに、本館も含めて大学図書館が重要な岐路にあることがわかった。大学図書館が現在置かれている位置を垣間見ることができたこの2日間の研修は、私にとって、図書館業務を身近に感じる大きな契機となった。

( かげやま ゆきこ 運営課 )

表1 日 程 表

時 間	9月9日(木)		時 間	9月10日(金)	
9:15~ 10:00	機器展示 受付 (センター 10F 研究者交流室)		9:15~ 10:00	機器展示 受付 (センター 10F 研究者交流室)	
10:30 ~ 11:00	開 会 式 (センター 10F 大会議室)		10:30 ~ 12:00	第1分科会 Cセッション (センター 10F 大会議室)	第2分科会 Cセッション (工学部 大講義室)
11:00 ~ 12:00	基 調 講 演 (センター 10F 大会議場)				
12:00 ~ 13:30	昼 食	機器展示 (センター 10F 研究者交流室)	12:00 ~ 13:00	昼 食	機器展示 (センター 10F 研究者交流室)
13:30 ~ 15:00	第1分科会 Aセッション (センター 10F 大会議室)	第2分科会 Aセッション (工学部 大講義室)	13:00 ~ 14:30	全 体 会 (センター 10F 大会議室)	
15:00 ~ 15:20	休 憩	機器展示 (センター 10F 研究者交流室)	14:30~14:40	休 憩	機器展示
15:20 ~ 16:50	第1分科会 Bセッション (センター 10F 大会議室)	第2分科会 Bセッション (工学部 大講義室)	14:40~15:00	閉会式 (センター 10F 大会議室)	
			15:00 ~ 15:30	機器展示 (センター 10F 研究者交流室)	
16:50 ~ 17:20	懇親会会場への移動		機器等の展示は期間中の2日間 9日 9:15~17:00 10日 9:15~15:30		
17:20 ~ 19:00	懇親会 (関西研修センター)		参加受付場所 大阪市立大学学術情報総合センター 1階 ロビー		

平成10年12月1日

### 関西大学図書館がめざす方向 ビジョン7項目

- 1 学術情報を提供するためのメディアの多様化に対応しうる図書館をめざす。
- 2 関西大学図書館といえはすぐに思い浮かべられるような、本学図書館独自の事業を展開する。
- 3 インターネットなどを通じて積極的な広報活動を推進し、関西大学図書館の存在と特徴をアピールする。また、図書館ホームページでは、広報的な情報以外に、可能な限りの情報サービスを展開し、「図書館電子カウンター」の役割を持たせる。
- 4 いわゆる「図書館の公開」を推進し、蔵書のより有効な活用をめざす。
- 5 図書館が展開する諸事業を支えることができる人材の育成に努力を傾注する。
- 6 より有効な職員の活用が求められている本学の現状に対応するため、図書館のすべての業務を見直し、アウトソーシングの積極的活用を図る。
- 7 業者パッケージの導入を前提に、図書館システム全体のUNIX化 (= オープンシステム化) を推進する。

\*1 O P A C : Online Public Access Catalog

\*2 ガクジョウ : 学術情報センター (平成12年4月「国立情報学研究所」に改組した文部省管轄の大学共同利用機関)